

法華御籤の成立と展開

芹澤寛隆

はじめに

一、御籤とは

二、近世以前のくじ

三、元三大師御籤

四、法華御籤

一、「法華宗御圖繪鈔」

二、「法華経御圖感應籤」

三、「法華経御圖靈感籤」

四、「妙宗御圖繪抄」

五、「通俗絵抄法華経御圖感應籤」

六、その他

五、「法華御籤」成立について

六、小結

はじめに

筆者はかつて「常在寺藏法華經御圖靈感籤」^①、「法華經御籤」に関する一考察―新出史料『法華宗御圖繪鈔』を手がかりに―^②」等で法華御籤について考察を行ってきた。それらの成果の中で、法華御籤の成立と展開について、法華宗が関わっていたと考えられるという仮説を提唱していた。本稿では「元三大師御籤」との関連も含めて、法華御籤の成立と展開について、整理を試みた。

一、御籤とは

そもそも、籤とは何か。「広辞苑」によれば

古く、神意をうらなう方法の一つ。のち、容易に決しがたい事柄の決定に用いられるようになった。紙片・竹片・こよりなどに文句または符号を記しておき、その一つをぬきとらせ、吉凶・勝敗・等級などを決定する。^③

とあり、人智の及ばぬ事に対して、神ないし仏の意を求めるところを指す。古くは盟神探湯も神意を知る術として存在していた。文化成立後、様々な形で仏意、神意を知る術があったが、その一つが籤ということになる。なかでも我々が現在各地で目にする「おみくじ」は最も身近に仏意・神意を知ることのできるものと言えよう。最近

ではテレビ番組を基にした「おみくじ」やアイドル・アニメのコメントが附された「おみくじ」など、「仏意・神意」に限らないファンシーなものも少なくない。

今では多種多様に活用されており、当初の目的とは異なる用いられ方もされている「おみくじ」であるが、もともと「御籤」として成立した時はどのような意図で用いられていたのであろうか。中村公二氏によれば、「御籤」とは

人間のうかがい知ることのできない、あるいは通常の理解を超えたさまざまな問題についての回答（お告げ、啓示、託宣など）を、もろもろの手段によって神的存在から引き出そうとする試み⁴

であり、「籤」本来の意味同様に、仏意・神意を知る術として成立したと考えられる。日本史上、最も「御籤」が広く活用されたのは近世であると考えられるが、その近世の「御籤」について御籤研究の第一人者であった大野出氏は

おみくじに関する史料は興味深い。現代でも、おみくじは多くの日本人に親しまれ、また日本文化の一つとして海外に紹介されているほどであるが、江戸時代にあつては、現代とは比較にならないほど、おみくじが人々の日常生活の中に溶け込んでいた。江戸時代には、全ての番号のおみくじを一書にまとめた御籤本と呼ばれるものが数多く刊行されていた。（中略）江戸時代の人々の日常生活の中に、おみくじが如何に密接に関わっていたかが窺い知れる。

現代に較べれば、情報は限られ、科学的思考も進んでいなかった江戸時代である。ものごとの判断に迷った時、おみくじによって可否を決するということの意味が、現代とは比較にならないほど重かったと考えられる。かの新井白石でさえ、むすめの縁談に際して、おみくじによって可否と決していたというほどである。

江戸時代の人々にとつて、おみくじに対する依存度、信頼度は、現代よりもはるかに大きかったということ
は間違いないことであろう。

と、現代人とは比べものにならないほど、真摯に、かつ真剣に「御籤」を活用していたと述べている。

日蓮門下においても、様々な形で「御籤」の活用がなされてきた。特に近世後期に成立した「法華御籤」につ
いての考察を通じて近世日蓮門下の布教の一端を考えることができると考えている。

二、近世以前のくじ

御通ヲハ何様可申聞候。幸ニ御連枝御座候へハ。其内就御器用可被仰出候。其又けに、不可叶時宜候者。
御兄弟四人御名字ヲ於八幡神前御圖ヲメサレ可被定歟由申入處。然ハ御圖タルヘキ由被仰出了。

（満濟）仰せの通りをば、何様申し聞かすべく候。さりながら、何度もこの面々は歎き申し入るべき心中
に候。幸ひに御連枝後座候へば、その内、御器用に就て仰せ出るさるべく候。それ又実に、時宜に叶ふべ
からず候はば、御兄弟四人の御名字を、八幡神前に於て、御圖を召され定めらるべき歟。

（義持）然れば御籤圖たるべし。

今谷明「籤引き將軍足利義教」による書き下し

応永三十五年（一四二八）一月、室町幕府四代將軍であつた足利義持は死の床にあつたが、後継を定めずにいた。
その際に醍醐寺の僧、満濟が諸大名の意向を受けて、後継を御籤を用いて採用してはという提案をし、義持が了

としたもの⁸。この籤によって当時青蓮院門跡であった足利義教が六代將軍に就任したとされる。將軍という重要な職を八幡の神前で選ぶという行為は、先に挙げたように「通常の理解を超えたさまざまな問題についての回答」を得るためのものとして、当時機能していたことが分かる。こうした、解決が難しい問題を神仏に問うという行為は日蓮門下にも存在していた。

夫吾今円頓之宗旨者從元師蓮公大士五代之祖源師、歳五十三、永和四戊午正月十八辰刻、頓示非滅現滅之粧給故、御遺跡相統之事不分明、然問大衆為檢義連署云、各々闇量負之儀、宣任仏前御闡被貫首云云、然則三度之御闡予以得之、頑愚之伝受雖憚多冥慮非可黙止、入文室開函底得⁹。

京都妙顕寺第六世日霽聖人（一三四九〜一四〇五）に関する記述である第五世の老源和尚（一三二六〜一三七八）が永和四年（一三七八）に突如遷化した後、後継の貫首を仏前におけるくじ引きで決めることとなり、日霽（通源）・日実（京都妙覚寺開創）・日成（妙覚寺）の三人が候補となったが、三度とも日霽の名が出たことから、日霽が貫首となった。その後、日実・日成は退出して妙覚寺を創建し、像門初の分流となったという出来事を記録したものである。他宗においても同様の決定方法が用いられていたかは管見の限りではあるが、確認できなかった。いずれにしても貫首という職の決定に「くじ」を用いていたこと、その決定に従わない者もいたということ、先述の足利義教就任時よりも前に「くじ」が活用されていたという事実は興味深い。

日隆聖人未來遺言之〇（古に又）
右、被仰下之條

日隆聖人御入滅已後、於本興寺能化、七年之間可相待器用之人、但、其中修學者有之、僧衆・檀方以相談合可定住持者也、若器用之人多者、如京都、於本尊御前、可取御闡、仍為後代、被仰下之処、如件

宝徳三年二月一日

日隆（花押）¹⁰

宝徳三年（一四五二）に記されたときされる、日隆聖人の遺言状の内容。本興寺能化としてふさわしい人物が複
数いたときは京都本能寺のように、御本尊の御前にて御鬮を以て決定せよとある。両山一寺の關係にあつたとさ
れる中で、「御鬮」を用いて住持すなわち住職を決定することも日隆聖人が容認していたことは、興味深い。と
同時に、器用の人が現れるまで七年待つてもよいという言葉も、先述した妙顕寺の分流を踏まえてのものであつ
たと考えられ、一致結束する重要性を理解していたからこそそのものであると考えられる。

以上のことより、少なくとも四条門流では、「籤」によって仏意を得るといふ行為は容認され、活用されてい
たということが出来るであろう。参考までにその後の日蓮門下における「くじ」による住職決定について確認し
たい。

御當家令條十一

甲州身延久遠寺後住之儀、争論を糺明申渡覺

（前略）

一、身延住持職、如日境、日奠日筵之例、於佛前取鬮可相定：

（中略）

延寶七年十月四日¹¹

近世に入ると、身延山久遠寺でも「くじ」を用いて住職を決定していたことが確認できる。しかも、多くの例
をが挙げられているように、「くじ」を用いて決定することが常態化していたことがわかる。このことから、「法
華御籤」成立以前に、日蓮門下でひろく「くじ」によって仏意を得るといふ行為が容認されていたと言ふことが

出来ると思われる。

三、元三大師御籤

次に、「法華御籤」成立以前の「仏教系みくじ」について概観する。現在までも、大半の寺院等で用いられている御籤は、近世初頭に整理され、流行した元三大師御籤をルーツとしている。以下にその一例を挙げる。(次頁写真②)

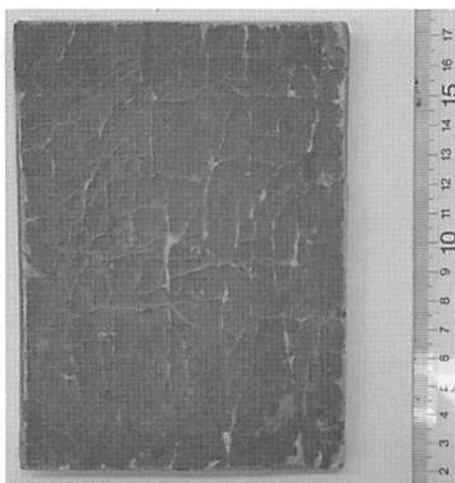
内容としては、番号、吉凶、漢詩、漢詩の語句の解説、みくじ全体の意味、個々の内容が記されている。このうち、御籤の中の漢詩(五言四句)が平安時代の僧、元三大師(慈恵大師)良源作と言われてきたためにこの名が付いたといわれているが、最近の研究では中国から伝来した「天竺靈籤」に基づくものであるとされる。

先行研究によると「天竺靈籤」の漢詩を元三大師と結びつけたのは天海僧正(慈眼大師)とされる。天海が「元三大師御籤」を普及させるきっかけを作ったというのが現在の定説となっている。いずれにせよ、近世以降、「元三大師御籤」を題した書籍は多く発行されている。

ここで、おみくじを引く様式についても確認したい。そもそも、当初は、現代のように御籤を紙片で受け取るという様式は存在していなかった。最も古い様式とされているのが

・僧侶が御籤箱を振り、御籤竹を引き出し、出た結果を伝えるというもの

である。古いを依頼する側は一切関与することなく、僧侶の手によって結果がもたらされる。現在も比叡山の元三大師堂にこの様式が残っているが、このような様式はほとんど現存していない。



写真① 芹澤蔵『元三大師御籤』貞享五年

その後、近世以降、数多く出版されてきた「元三大師御籤本」が用いられるようになる。そこでは、各自が「御籤本」を持つが、「くじ」を引くのは僧侶であり、番号を聞き、自分で調べるといった様式であったと考えられる。それは、「御籤本」が多くの書肆から出版されていること、初期に出版された「御籤本」には「御籤箱の作り方」が掲載されていないのに対して、近世後期になると、「御籤箱の作り方」が掲載されるようになることから想像できる。

次いで、御籤箱を自作したり、携帯しながら、自ら結果を知るといった様式が誕生する。それは、「大雑書」という、今で言う「生活百科」のような書物に御籤の項目が立てられていることや、携帯用の御籤箱が作成されて



写真② 同上本文

いることから確認できる。

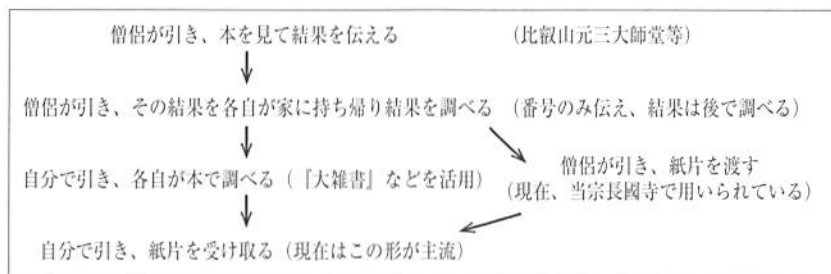
以上の様式を整理すると、表①のようになるとと思われる。



写真④ 芹澤蔵「御神占」（携帯用）



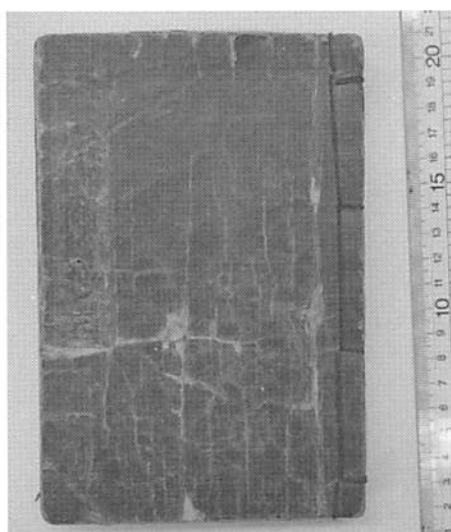
写真③ 「大雑書中の御籤」



表① 御籤の引き方の変遷

四、法華御籤

上記のような、「元三大師御籤」に対して作り出されたのが「法華御籤」と考えられる。諸本については、かつて拙稿「法華経御籤に関する一考察―新出史料『法華宗御籤繪鈔』や拙著『常在寺藏法華経御圖靈感籤』で述べたので、詳しくはそちらを参照頂きたい。



写真⑤ 芹澤蔵『法華宗御圖繪鈔』

一、『法華宗御圖繪鈔』

文化十四年十二月（一八一八年一月）に二都書林から発行されたものであり、京都・大阪・江戸の書肆が名を連ねている。全一卷から成り、序文は谷中宗林寺第二〇世龍進院日行、跋文は浅草田甫幸龍寺第十八世祥趣院日選による。両寺とも本国寺末頭録所三ヶ寺の一つであり、江戸を代表する日蓮宗寺院。

- ・法華と名の付く最も初期の御籤本。特徴を挙げると、
- ・法華と名が付くものの、用いている御籤は百籤、すなわち観音籤であり元三大師御籤であること
- ・江戸利益感應諸佛神廻等、日蓮門下全体に亘る内容

であること

・中老僧の順列および肩書きについて、『法華宗御圖繪鈔』については他の文献と異なること
特に特に日辨聖人、日法聖人の肩書きが法華宗寺院開山になっている点、天目聖人が品川妙国寺（現、天妙国寺）祖とされている点など、勝劣派の意見が取り入れられていることが挙げられよう。



写真⑥ 『大増補 法華經御圖靈感籤』は全三冊

二、『法華經御圖感應籤』

『法華經御圖靈感籤』跋文に「天保癸巳（天保四年…一八三三）」とあることから「法華宗御圖繪鈔」後、『法華經御圖靈感籤』前の成立。特徴としては

・『法華經』の經文を「元三大師御籤」の漢詩の代わりに採用

が挙げられる。

三、『法華經御圖靈感籤』

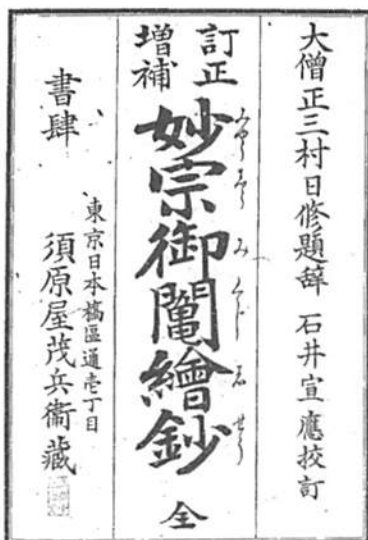
常在寺所蔵本は平楽寺書店編輯部編輯昭和改版（開宗七百年記念改版）であり、底本は文久元年（一八六一）に刊行されたものである。特徴としては

・御籤と直接関係ない内容を網羅していること

全国各地の諸像や御遺文、繪旨、先師御影、日蓮大聖人年譜、諸国本山明覽、生活の知恵などが掲載されている。

近代以降

四、『妙宗御闡繪抄』



如く我宗曩に御闡ありと雖も或ハ繁ハ略
 不其宜きを得ざる者を見ず北畠氏夙に茲に感
 あり頃日來て余に校訂を求む余素より淺學不
 識其任不中らずと雖も遂に諾して以て間を偷ん
 で聊り諸書を參考し其約を尋む然も唯二三
 の書を折中して間々三語を加ふるに過ぎず後
 哲を待て以て其大成を望む夫の宗義を論じ
 祖意を尋ぬる若きハ學者の當ふ務むべき所初
 信の徒に要ふあらざるに於て之れを贅せを觀
 るも其諸れを諒せよ

明治二十一年戊子年小春 石井宜應識

写真⑦ 国会図書館蔵『妙宗御闡繪抄』表題および跋文（部分）

このことから、「元三大師御籤」と異なり、三冊いとまとめて、僧侶の手引きも兼ねた書物であったと考えられる。

石井宣應校訂、(須原屋)北畠茂兵衛発行、三村日修(日蓮宗管長)題辞である。特徴としては
・籤本体は百籤、すなわち観音籤であり元三大師御籤を用いていること

が挙げられる。それまで培われた「法華経御籤」の流れとは異なる意図があったものと考えられるが、詳細は不明である。



法華御籤の成立と展開(芹澤寛隆)



写真⑧ 芹澤蔵『通俗絵抄法華経御感應籤』明治四二年発行

五、「通俗絵抄法華經御圖感應籤」

内容としては『法華經御圖感應籤』を活字化したもの。

六、その他

紙片としての法華御籤



写真⑨ 鷺山寺蔵「法華御籤紙片」

第一番 大上吉	
妙法蓮華	諸の原文中の帝王位とし去ふべき法蓮華の第一を得たる者で、實に此上もなき有難きものとす。
經序品第一	諸の仏が實證命忍仏の御誓に依りて諸説を翻説して、而して一問が御誓を演き正法に應じ世に於て意なり。
各礼仏足	
退座一面	

此にくじを得たる人は大上吉には相違なきも直に以て世に初れ身分領れて後難ある人は吉なれど平人では異道で却つて感し致し身を供めよと云ふ候と思ひて万事を慎み信のあるべし。○縁因は幸は叶ふべし。○所人は本願すれども美引くべし。○縁因は良しく。○持人は成るべし。○欠せ等は早く西の方を推せば出る事あるべし。○公事等は面面相見合すべし。○転宅旅行等吉とす。○其後早時也。

写真⑩ 長國寺にて現在用いられている御籤

五、「法華御籤」成立について

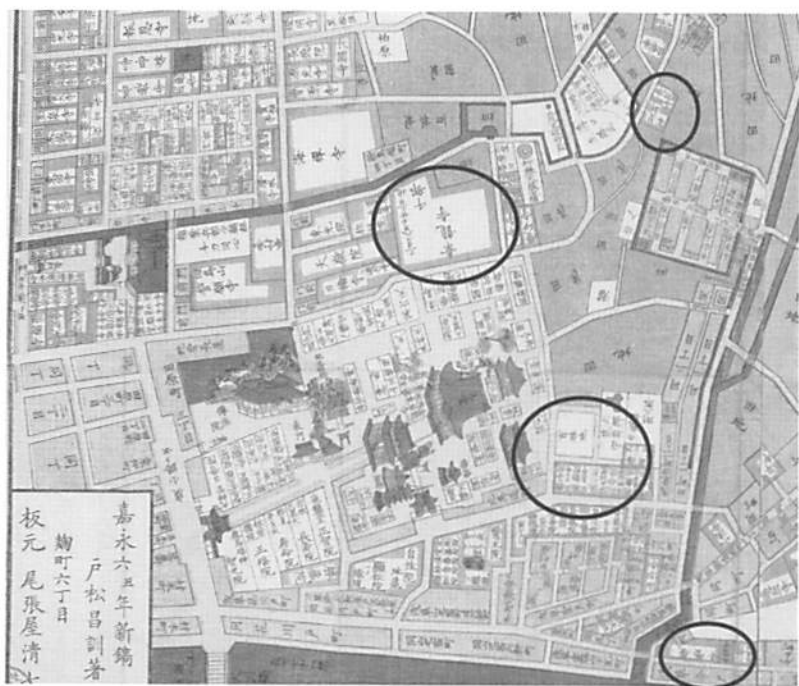
以上のように、細々とはあるが現代まで「法華御籤」は用いられてきた。ではあるが、門下も含め圧倒的に

多数の寺院で用いられているのは「元三大師御籤」であることは間違いない。では、そもそも「法華御籤」を新たに作り出そうとした動機は一体何であったのだろうか。ここで参考になるのが、明治以降の和歌御籤の成立である。明治元年の神仏分離令を受けて、それまで寺院と同じく「元三大師御籤」を用いていた神社も多かったが、明治維新を機に神社は神社の神のお告げとしての和歌を用いたおみくじを創ろうという機運が起ったのである。つまり、「元三大師御籤」という対象があつて、それと異なるオリジナルを創り出す機運が和歌みくじよりも前に「法華御籤」で存在していたと考えられるのである。ではその動機として考えられるものは何か、筆者は以下の四つの可能性があると考えている。

一、対天台の意識

近世以前も洛中法華と叡山の間での対立や「法華宗」の宗名をめぐる争いがあったことは周知の通りであろう。このことから、日蓮門下にはそもそも天台宗とは異なるのだという意識が存在していたことは間違いない。その上で、「元三大師御籤」は天台宗の天海僧正が弘めたとされるものであり、天海ゆかりの寺院である寛永寺や、江戸期に隆盛を誇っていた浅草寺など、多くの寺院で用いられ、かつ庶民もまた「元三大師御籤」を手にして自身の運勢や生活の参考にしていた。その状況にあつて、天台との相違を意識する寺院や住職の手によって「法華御籤」が生み出されたのではないだろうか。

先に挙げた『法華宗御圖繪鈔』の跋文を書いた浅草幸龍寺や、鷲大明神を掲載している当宗長國寺をはじめ、多くの日蓮門下の寺院が浅草周辺にあった（写真①参照）が、当時浅草の中心であった浅草寺の存在は、規模の違いもあり、ともすれば埋没しかねない所にあつたと考えられる。そうした地理的状况から、少しでも他との相



写真① 国会図書館蔵「〔江戸切絵図〕、今戸箕輪浅草絵図」(部分、筆者加筆)

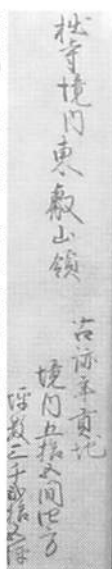
違点を作り出すために考案されたのが「法華御籤」であつたとは考えられないだろうか。

二、江戸における法華信仰の存在

望月真澄氏が『江戸の法華信仰』¹⁵⁾中で述べているが、当時各地にあつた講中や出開帳、江戸各地にあつた祖師像、祖師信仰、守護神信仰を通して、檀家制度にとらわれない一代法華や巡拝信仰が盛んであつた。その中で、日常生活にまで信仰を取り入れることのできる「御籤」は格好のツールであり、他宗との相違を明確にできるもの、参詣者を集めるのに格好の題材であつたのではないだろうか。

三、法華宗の要請

拙稿等で述べたことではあるが、長國寺はかつて東叡山すなわち寛永寺領であつた。先に述べたように「元三大師御籤」の普及には天海が大きく関わつていたとされている。また寛永寺は天海によつて開創された寺院であり、江戸における天台宗の一大拠点であつた。その境内地にあり、天台との相違を明らかにする必要性を最も求められていたのが長國寺であり、浅草寺との相違を必要とした幸龍寺等日蓮門下の寺院とともに、「法華御籤」を生み出す必要性があつたのではないだろうか。その上で、当宗は当宗で、一致派との相違も作り出す必要があり、その中で本山開基である日辨聖人、日法聖人の肩書きを法華宗門史に基づいた記述とするなど、一定の影響力があつたと考えられるのである。

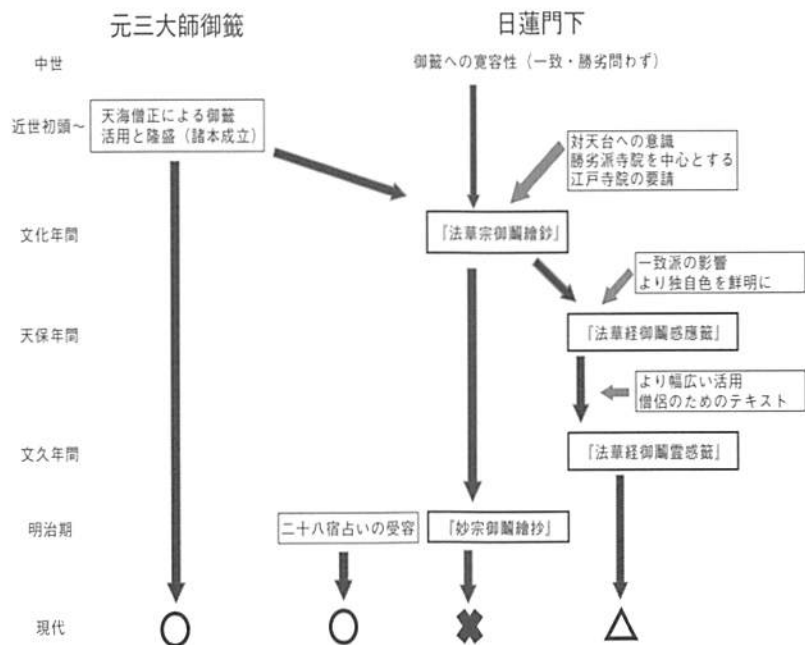


写真⑫ 長國寺蔵 長國寺境内図（部分）

四、倫理的処世訓と信仰の結びつけ

大野出氏の研究によれば、『元三大師御籤』中の注解には「正直」や「儉約」「堪忍」「辛抱」「忠義」といった、倫理的処世訓が多く示されている。それに対して『法華宗御圖繪鈔』『大増補 法華経御圖靈感籤』の注記や解説にみられる倫理的処世訓は神仏への信仰が大前提であり、上記のような表現はほとんどない。「法華御籤」成立当時は心学が盛んであり、その中では「倫理的処世訓」が説かれていた。その「倫理的処世訓」と「信仰」を結びつけることで、『元三大師御籤』との相違性を生み出すとともに、法華信仰を強めたいという意識があったのではないだろうか。

当時の心学者で御籤を用いた処世を説いている人物に脇坂義道（？～一八一八）がいる。脇坂は江戸石川島にあった加役方人足寄場教師として江戸で教鞭を執るとともに多くの門人を育成していた。この脇坂の兄弟子で加役方人足寄場開設時の教師を勤めていた人物に中沢道二（一七二五～一八〇三）がいる。彼は手島堵庵に心学を学んだ後、江戸に下り、心学を弘めたとされている。中沢の門人には時の老中松平定信など大名も多く、先に挙げた加役方人足寄場では教諭方となり、軽罪人・虞犯者達の自立支援に勤めた人物である。この加役方人足寄場の開設に尽力したのが長谷川宣以（平蔵）（一七四五年～一七九五年）である。この中沢と長谷川平蔵はそれぞれ法華宗妙壽寺（当時深川猿江、現在世田谷区烏山）、日蓮宗戒行寺（新宿区須賀町）に墓地があることから、法華



表② みくじの展開

信者であったと考えられる。想像の域を出ないが中沢や脇坂によって心学における処世を法華に応用する下地がすでに存在しており、本来心学には組み込まれない「御籤」の受容がそれをさらに発展させ、「信仰」を大前提とする「法華御籤」を生み出す土壌になったのではないかと考えられる。

六、小結

甚だ雑はくではあるが、「法華御籤」の成立と展開について整理すると前図のように整理できるのではないだろうか。

本稿では「法華御籤」の成立と展開について、これまで収集してきた史料や周辺状況から、考察を試みた。之まで述べてきたが「法華御籤」成立には当宗をはじめとする勝劣派が少なからず関与している可能性をより深めることができたと考えている。そもそも御籤はいわゆる思想家の手によるものではないために、史料の価値は一段低く見られる傾向があったように思われる。ではあるが、「法華御籤」を考察することはそのまま先師の危機感や意識を見いだす事につながり、延いては法華宗の布教の歴史を知る手がかりともなり得るものであると考えている。今後は引き続き史料収集につとめながら、今回提示した「法華御籤」成立の動機の説明を進めていきたい。

本稿は法華コモンズ令和四年前期「法華仏教講座」にて発表したものを基としている。発表の機会を与えてくださった上、その内容を『桂林学叢』へ掲載することを快く了承くださった法華コモンズ学林長布施義高先生は

じめ会員各位に深く感謝申し上げます。

註

- (1) 芹澤寛隆編「常在寺藏法華経御圖靈感籤」靈鷲山常在寺 平成二八年
- (2) 芹澤寛隆稿「法華経御籤に關する一考察」新出史料「法華宗御圖繪鈔」を手がかりに―『桂林学叢』第三〇号、法華宗教学研究所、令和元年、一五一―一六九頁
- (3) 新村出編「広辞苑」第六版平成二十年七九二頁
- (4) 中村公一著「一番大吉！ おみくじのフォークロア」大修館書店、平成11年、一九頁
- (5) 大野出著「元三大師御籤本の研究…おみくじを読み解く」思文閣出版、平成21年、七頁
- (6) 「統群書類従」補遺一「満濟准后日記」統群書類従完成会、昭和三三年、四七七頁
- (7) 今谷明著「籤引き將軍足利義教」講談社、平成一五年
- (8) 「建内記」には満濟の提案ではなく、義持自身が御籤を用いるという決断をしたという記述があり、今谷氏は「建内記」の記述が真実であろうとしている。
- (9) 立正大学日蓮教学研究所編。「日蓮宗宗学全書」十八卷、日蓮宗宗学全書刊行会、昭和三四年「竜華秘書」六十二頁
- (10) 「本能寺史料」二十四頁
- (11) 「古事類苑」Vol.10、宗教部二「御當家令條十二」吉川弘文館、八四五頁
- (12) 大野氏前掲書
- (13) 国立国会図書館デジタルコレクション「妙宗御圖繪抄」<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/760886>

法華御籤の成立と展開（芹澤寛隆）

- (14) 国立国会図書館デジタルコレクション「〔江戸切絵図〕今戸箕輪浅草絵図」(部分) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286208>
- (15) 望月真澄著『江戸の法華信仰』国書刊行会、平成二七年参照のこと